

年間第十四主日

2017.7.9

マタイ 11・25-30

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

「疲れた者、重荷を負うものは、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。福音書の中でも最も慰めに満ちた、わたしたちへのイエスの招きのことばです。

今日の福音にはイエスのおことばだけが響いていて、弟子たちの姿も、群集の姿もありません。それだけに、今日の福音のおことばは、福音書の枠を超えて、直接的にわたしたちの心に響いてくるように思えます。イエスのこのおことばは、福音書の中の誰かにというよりは、今このおことばを聴いているわたしたち一人ひとりに語りかけているように響いています。

「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。わたしたちのカトリック信者としても信仰は、わたしたちがこのイエスのおことばを、どこまで身をもって味わうことができているかどうかにかかっています。「わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われるイエスとの出会いの経験なしに、そのイエスのもとの安らぎを味わう経験なしに、わたしたちの信仰は、疲れきった身と心に、さらに負わせられた重荷以外の何ものでもなくなってしまいます。

「わたしのもとに来なさい」と呼びかけておられるイエスに応えるためには、幼子のようにならなければなりません。「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われるイエスのおことばに魅力を感じつつも、このおことばに身を委ねることができないわたしたちがいます。心身に言いようのない疲労が蓄積してゆくを感じつつも、背負い込んだ重荷を片時も降ろすことが出来ないでいるわたしたちがいるからです。幼子のようになるためには、わたしたちはあまりにも大人になり過ぎてしまっているのかもしれない。「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい」とイエスは言われますが、日々背負わなければならない重荷があるから、その重荷を背負うことで疲れきってしまっているわたしたちがいるから、イエスのもとに行くことが出来ない現実の中に、わたしたちはもがいていることのほうが多いかもしれません。

そのような現実を生きるわたしたちが、イエスの招きに応えることが出来ているとすれば、それは、イエスの招きがわたしたちの心に届いたからです。わ

わたしたちの信仰とはそのような出来事です。そしてそれは、わたしたちの上に起こった奇跡のような出来事です。

今日の福音には、イエスの父なる神への喜びに満ちた賛美の声が響いています。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、これは御心に適うことでした」。イエスはご自分の招きに応えた人々がいることを、大きな喜びをもって父なる神に感謝しておられるのです。そのことによって、ご自分をわたしたちの現実の中にお遣わしになった父なる神のお望みが実現していることに感謝し、父なる神をほめたたえておられるのです。

わたしたちのカトリック信者としての信仰は、このようなイエスと父なる神の喜びに満ちたいのちの交わりの中にあるのです。父なる神のお望みは、わたしたちが御子イエスを信じる者となることであり、父なる神から遣わされた御子イエスの願いは、わたしたちが幼子のようになって父なる神を信じる者となることだからです。

わたしたちはイエス・キリストを信じる教会の信仰の中で洗礼を受けてカトリック信者になりました。わたしたちが受けた洗礼は、神の子イエスの十字架の死と復活によってこの世界のもたらされた、神からの救いに与ることであったはずです。その救いとは、神の子イエスがわたしたちの罪の全てを一身に背負って、わたしたちのために十字架の上で死んでくださったことによって、わたしたちにもたらされた救いであったはずです。洗礼を受けたときわたしたちは、わたしたちの教会に伝えられてきたこのような信仰を受け入れて、洗礼の秘跡の恵みをいただいて、神の子らとされる新しいいのちをこの身にいただいたのです。洗礼の時に、わたしたちは幼子のようになって、イエス・キリストをわたしたちの救い主と信じる、新しいいのちを生き始めたのです。これこそが永遠のいのちへの道だと信じて、カトリック信者としての信仰の歩みを始めたはずです。今日の福音に響いているイエスの喜びの叫びは、このようなわたしたちについての、イエスの父なる神への感謝と賛美に満ちているのです。今日の福音を通して、わたしたちの上に響くこのようなイエスの喜びがわたしたちの心にも伝わってくることを願いたいと思います。もう一度、洗礼の時の、あの幼子のような心に戻って、イエスのもたらしてくださった喜びの中で、イエスとともに喜びに包まれた、信じる者たちだけが味わうことのできる喜びを味わいたいと思います。

そのためにも、今日の福音に響くイエスの招きのことばにもう一度耳を傾けましょう。「疲れた者、重荷を負う者は誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」とイエスは言われます。イエスのもとでは、負っている重荷を降

ろしてもよいのです。いや、幼子のような信頼をもって、イエスのもとにわたしたちの重荷を降ろさなければならないのです。イエスもとで、イエスとともに父なる神に祈るということはそのようなことです。背負って来た重荷のことをしばらく忘れて、イエスのもとにある休息の一時の中で、わたしたちの心が、イエスの心のように、謙虚な柔和な心になってゆくことを待ちたいと思います。イエスのもとで、イエスとともに祈るということはそのようなことです。イエスの謙虚さ、イエスの柔和さとは、十字架の道に対する謙虚さであり、十字架の死を受諾する柔和さです。イエスはその全てを、父なる神の御自分に対する御心として、御自分に託された使命として、神の御前に謙虚に、柔和に、屠り場に引かれてゆく羊のように受け入れられたのです。そのイエスがわたしたちの心にささやきかけてくださるのです。「わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。イエスのくびき、イエスの荷とは、イエスが生涯負い通されたイエスのくびきであり、イエスの荷です。それは神の子としてのイエスが父なる神の御手から受けたイエスの十字架です。

「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」との招きは、十字架からのイエスの招きです。そのイエスの十字架のもとにわたしたちが負っている重荷の全てを降ろして、自分の負っている重荷を忘れて、イエスの十字架を見上げることが出来るなら、そのイエスに学ぶことができるなら、わたしたちは力を回復して、再び歩み始めることができるでしょう。その時、わたしたちは「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い」とイエスが言われたことを身をもって感じ取ることが出来ることでしょう。わたしが負っている荷をイエスがともに負ってくださることを、心のうちに確信できるからです。

今日もこうしてイエスの招きに応えることが出来たわたしたちは、そのことを感謝して、イエスが保証してくださっている安らぎをこの身にいただく恵みを祈り求めたいと思います。